

ガーデン直矩

姫路城の植栽を想像する

姫路城を調べていても、いつもわからないことばかりです。その中でもかつて城内にどんな植物が生えていたのか、ということはほとんどわかりません。わかることは、松が土塁の上などに繁茂していたことくらいです。こう言うと、「原生林があるではないか」と反論されそうです。確かに、「原生林」は城正面(南側)の諸曲輪に比べて人の手が加わっておらず、まさに築城当初からの植生をそのまま残しているかのようです。しかしこれにしても林内でタラヨウが優占樹種になっているのは、人工的な植林の可能性が高いことが指摘されており(『姫路市史』第14巻)、「原生林」という呼称に引きつられた判断は慎まなくてはなりません。

一方、城の正面に当たる藩主の居館などのあった三の丸一帯には、作庭に伴っていろいろな植物が植えられていたと想像されます。「城踏」No.1で紹介したように、それぞれ藩主の個性が反映される庭とそれを彩る植栽があったはずで、そこで本号では、姫路城内にはどんな植物が植えられていたのか、文献史料をもとに少し認識を広げてみましょう。

姫路城の歴代城主の中に松平直矩(なおのり)という大名がいました。彼は寛文7(1667)年に越後村上から姫路へ国替となりました。村上在城のときから彼は日記をつけており、その写本が現在『松平大和守日記』として刊行されています(『日本庶民文化史料集成』第12巻、三一書房、1977年所収)。芸能史の分野ではよく知られた史料ですが在城時の記録もあるので、城郭を研究する上でも貴重な文献といえることができます。



絵図に描かれた姫路城三の丸の樹木

この日記には、明暦4(1658)年から元禄8(1695)年までのできごとが書かれ、年次によって記事欠落や内容に精粗があります。そのため姫路在城時の関連記録は、寛文7年8月からのほぼ5ヶ月間の記事の中に集約されています。その中で植栽に関しては、「八代屋敷に紅葉一本、古田二右衛門所より堀寄植候様二言付」(8/29)、「侍共常之番所之前、蜜柑百八十余有之」(11/3)、「庭ニ藤植、是ハ小笠原孫六屋敷ニ有之也」(11/6)、「代々亭本根村源兵衛くるゝ、則寝間之庭江移、石川与五左衛門松くるゝ、此松ハ大キニ有之庭へ難入ニ付先門之外ニ置、後二小書院庭江移植」(11/24)という記事が見られます。これらから、姫路城内や茶屋には紅葉、蜜柑、藤、橙、松といった樹種が植えられていたことがわかります。

ところで、直矩が姫路に入った直後の寛文7年8月22日、彼は天守に登って「於二重目長鮑勝栗祝」をしています。その後、刑部社、「三左衛門殿丸」「天樹院殿丸」「中務殿丸」を見分けて帰館しています。翌23日には馬に乗って内曲輪の見分に出かけています。これは、酒井家時代の「城内廻り」と同様です(「城踏」No.68参照)。この見分の翌日には次のような記事があります。

村上より大廻舟到着、植木等来、飾万津迄上ヶ候よし也(寛文7・7・24)

国替によって、家中の家財を含めてたくさんの物資も姫路へ輸送しなくてはなりません。そのために船便を利用したようですが、「植木等来」と記しているところをみると、直矩の関心は村上から船載された植木にあったことがわかります。つまり、村上時代の記事には、姫路城内の植栽を知る上で参考になるものがありそ

うです。そこで村上城に関する記述を見てみると、次のようなものが目に留まります。

伊白丸庭へ、本丸より木共取寄植(寛文3・7・17)

伊白丸とは、城山山麓の居館であった二之丸のことです。その屋敷の庭に、城山山頂の本丸から木を取寄せて植えています。庭木に適した樹木が見つければ、山から麓へ移植したことがわかります。あるいは、本丸とは城内の植栽に必要な樹木を育成する場で、姫路城の樹木屋敷にもそうした役割があったのかもしれませんが。直矩は、この翌日(18日)、伊白丸での植木の植替え作業を終日見物していますから、庭の植栽に重大な関心を寄せていたことが察せられます。さらに8月10日には、

伊白丸ニ桜入用ニ候間、思寄次第可給之由、家中へふれる、今日ノ内も少々来植也

と、家臣へ触れを出しています。その日のうちに早速桜を提供する家臣があったようですが、翌日には「多桜くるゝ者有之」とあり、たった2日で桜がたくさん集まったようです。しかし、こうして集められた桜がすべて、すぐさま伊白丸に植えられたわけでもなさそうです。寛文4年3月8日には「同日より二之丸ニ桜植、是ハ去年家中より貰へきと言渡帳ニ付置之也」とあるからです。桜の提供を申し出た家臣名を帳面に記しておき、翌年3月になってその帳面に載っている家臣の屋敷、もしくは家臣が木を預けおいている植木屋から木を移したのでしょう。このように家臣が藩主に対して何らかの植物を提供するのは主人に対する贈答行為であり、家臣自らが季節の花や珍しい樹木(盆栽や生花用を含む)を贈っていたことがわかります。家臣が自分の屋敷で丹念に植木や盆栽、花の世話をしていた情景が目には浮かびます。これも平和な時代の武士の「仕事」なのでしょう。

ところで、直矩は寛文3年9月27日に、継室として東園権大納言基賢の娘長姫(ちょうひめ)を村上に迎えています。7月から二之丸で行われていた植栽工事は、長姫を迎えるための二之丸御殿改修に関連すると考えられ、二之丸に植える桜がすぐにたくさん集まったのも納得できます。直矩としては、公家の娘を京都から迎えるにあたり、彼女に気に入ってもらえるような作庭を企図していたのかもしれませんが。

寛文4年3月16日、二之丸では勝手庭の梅が開花し、花見が行われています。翌日には「糸桜」が開花、「難波梅」は満開となりました。いよいよ二之丸の庭々は春らしくなってきました。20日には吉田源六郎のところから座論梅が移植され、姥桜も満開となりました。そして22日には家臣たちを集めて花見が挙行されました。この花見は4月1日まで断続的に続いた模様で、このあとまもなく直矩は江戸へ出府します。翌寛文5年の春を、直矩は江戸で迎えます。長姫から手紙が届き、3月21日には二之丸の花が盛りとなったことが書かれており、梅と桜の花が中に包んでありました。その趣向に接した直矩は、家臣から集めた桜を植えた庭を長姫が気に入ってくれたと確信し、とても喜んだにちがいありません。

そして桜のシーズンが終わると、今度は躑躅やさつきの出番となります。

池之端より松、大ききしまつゝし取寄見る、松ハ求也(寛文4・4・17)

植木屋より夏桐鳴と云躑躅求寄、珍敷故帳二記之(寛文4・5・3)

江戸の松平家屋敷には植木屋が日常的に出入りし、珍しい植木などを購入していたようです。そのうち太兵衛と名乗る植木屋が村上までやって来ますから、珍しいものは江戸で購入していたと考えられ、前述の「大廻舟」とは津軽海峡から江戸経由で姫路に回漕された船とみられ、それに積載された植木には、江戸の植木屋から調達されたものも含まれていた可能性があります。

こうして『松平大和守日記』を見ると、村上城の御殿や江戸屋敷には松をはじめ、桜や躑躅、さつき、桃、橙、牡丹、南天、山茶花、柚子、楓、椿、栗、竹などが植えられていました。それらは、庭木や盆栽、花壇の花として直矩・長姫夫妻の目を十分楽しませたことでしょう。



向屋敷庭園の様子